

# 『万葉詞』 寄合索引稿

岩 下 紀 之

1

二条良基の業績のなかで、万葉研究の具体的成果を示すものは、この『万葉詞』ということになる。陽明文庫に一本が残るのみのこの書物であるが、いまでは、陽明叢書に収録され、見やすい存在になっている。万葉研究史のなかではとうに評価位置づけがなされており、この叢書の解題にも要点が論じられている。その一方、この書の第一の目的は連歌にあり、万葉語の研究も連歌の語彙を拡張するためにおこなわれたのであった。中世の万葉研究がある程度煮詰まってくると、寄合の認定というような、実用的なかたちを整えてくることになる。したがって連歌研究、また中世文学研究の面からの調査を始める必要が生じてくるのである。

本書は三つの部分からなっており、それぞれ万葉詞（一オ）、万葉集付詞 付寄合（六ウ）、万葉集卷第三雑歌（二七オ）との見出しがついている。第一の万葉詞の部では万葉歌の語が抜き書きされ、時に語釈がほどこされる。第二の万葉集付詞の部分では、第一以下万葉集の巻の順に一つ書きの形式で語が抜き出され、語釈がほどこされるものもあり、「秋萩二人ツマ」のように、寄合として示されるものもあり、時には和歌が引用されることもある。第一から第二十まで『万葉集』の順を追って書き抜かれるが、第四巻のみは見出しに立てられていない。ただし、一〇オの部分は巻四の歌からの語

とおぼしい。第三の部分は和歌が引用された上で語句が抜き書きされ、語釈あり、寄合ありだが、「一 イカツチニ イホリ 寄合」と明記するものもあり、「一 御舟山ニ 滝ノ上 寄合歟」とためらいをみせるものもある。また作者名を示すところもあったりなかったり、はじめは一つ書きされていたものが、三八オからは一の字が消えてしまったりで、いかにも整理途中の感がある。なによりも第二部分で万葉全巻を対象としているのに、ここでふたたび第三から記述しているので重複もあり、第八までの語が抜き書きされたあと、「集巻第九」という一行で本文が終わるので、巻九以下が書き継がれたのが切断紛失したのか、またはそれ以後が書かれなかったのか不明である。こうして、本書は未整理の不完全な書物と言うことになるのである。

とはいえ、二条良基の万葉研究の文学史的な重要さは明らかであるし、連歌と連歌師に対する影響力からみて、本書に注目し、研究の端緒を発見したいものである。本書がとりあつかう語彙が、後の寄合集に継承されていたかどうか、また本書が認定した寄合がその後の連歌で広く使われるようになったかどうか、というような研究題目が浮かんでくる。そのためここに寄合語の索引を作成することとし、単に一語を記したものは対象としないことにした。

ところで本書の奥書には

応安八月月日於撰政殿花本好士被書下了

とある。応安八年の撰政は二条師良であるが、花本の好士と関係がある人物といえはその父、二条良基以外に考えようもない。和様漢文のあいまいな文で、「書下」したのが誰かはあいまいである。一応「撰政殿において、花本の好士に書き下されおわんぬ」と読んで、良基が好士に書き与えたと解釈しておこう。

しかしそのように読むと二五オに

神サフルトハアナカチ神祇ニテアルヘカラス 社頭ニテハ神祇ナルヘシ 其他ハ只フリタルヲ云也 此例ニテ 嘉暦  
中殿御会ニ二条大殿御階ノ花ハ神サヒニケリ トアソハシ畢 此例也

とあるのが氣に掛かる。嘉暦年間の二条殿は、良基の父道平であるが、良基が父を二条大殿と呼称するのはややおかしくも思われる。後光明照院殿など、いくらでもふさわしい呼称はあり得るのである。しかし本書は完成された書物ではなく、整理途中の段階にあつたと考えられるのであつて、こうした呼称から良基作者説を否定するには至らないと考えられる。なお嘉暦年中には中殿御会が催された明証は発見できないが、『中殿御会部類記』には正中三年三月六日の御会の記録があり、「前関白従一位藤原朝臣道平」の名が見える。同年の四月に嘉暦と改元するので、これを指すのであろう。本書はあくまでも整理途中の段階を伝えるものであつて、こうした多少の不都合は、本書が推敲整理される段階で訂正されたであらうし、問題のある表現も改訂されていったであらう。

## 2

連歌の寄合集はさまざまなものが伝来しているが、鎌倉時代にさかのぼる『連証集』、恵俊編の『連歌寄合』、一条兼良の『連珠合璧集』と比較して、『万葉詞』の性格を探ってみよう。この三書は研究の成果が出版されており、寄合ごとに通し番号がうたれ、あとの二書には索引も付されている。<sup>注一</sup>ただ『連証集』には落丁があり、『万葉詞』は未完かつ脱落の可能性もあるということで、この点留意しておく必要がある。

この四書はいずれも万葉歌をひいて寄合の説明をする。とくに『連証集』と『連歌寄合』は和歌を引き、その寄合を使つ

た連歌の実例をも引くのであって、寄合が実作をともなっているのである。それに対し、『合璧集』と『万葉詞』は連歌の実例は引いていない。以上を念頭におきながら、引用されている万葉歌を相互に対照してみることとしよう。それぞれの校訂者が付した番号と新編国歌大観番号を併記して示すこととする。なお本稿ではいわゆる新番号で統一した。まず『連証集』に引かれる万葉歌は次の通りである。

四 51 たをやめか袖ふきかへすあすか、せ都を遠みいたつらにふく

六 431 かくれぬのはつせの山の山きはいさよふ雲はいもにかあらん

二〇 1734 山しろのいはたのを、は、そはら見つ、や君か山ちこゆらむ

二一 3600 むこのうらの入えのすとりはく、める君をはなれてこひにしぬへし

二二 ますらをかはと吹秋は音たて、とまれと人をいはぬはかりそ

二三 にしき木はちつかになりぬいまこそは君かしらせぬねやの中見め

二四 をくるまのにしきのひもときたれてあまたねもせず君ひとりなり

二三 78 とふ鳥のあすかのさとをおきていなは君かあたりは見えすかもあらん

三五 869 きみをまつまつらの浦のあま人はとこよの国のあまをとめかも

三九 てたまゆらしつはたぬのをおりかけてさらしえたりとみゆるうの花

四五 小倉山峯たちならしなく鹿のへにけん秋を知人のなき

五〇 924 和かの浦にしほみちくれはかたを波あしへをさしてたつなきわたる

六五 500 1122 いにしへに有けん人も我ことか三輪のひはらにかさしおりけむ

六六 378 よしのなるなつみの川の河よとにかもそなくなる山かけにして

- 八三 2881 さをしかの入野のす、きはつをはないつしかいもかたまくらにせむ  
一一七 266 もの、ふのやそうち川のあしろ木にいさよふ波のよるへしらすも  
一一八 1144 しなかととりあなのをゆけはありま山夕きりたちぬやとはなくして  
一二三 はしたかの野守のか、みえてしかなおもひおもわすよそなから見ん  
一三一 2318 まきもくのひはらもいまたくもらねはこ松かうへにあは雪そふる  
一三二 4 たまきはるうちのおほ野にこまなへてあさふますらんそのくさふかに  
一三八 272 旅にして物恋しきに山もとのあけのそほ舟おきにこくみゆ  
一四二 1041 いまつくるくにのみやこは山かはのきよくみゆるはうへしらるよし  
一四三 3487 山とりのほろのますをにか、みかけかなふへみこそなによそりけり  
一四七 ひめもすに見れともあかすあをによしならのみやこの山となてしこ  
一四九 256 あまさかるひなのなかみちこきくれはあかしのとより山としまみゆ

ここに記した二十五首のうち、三五・五〇・六五・一四九の四首は万葉とは称さずに引いているのであるが、万葉歌である。一方、二二・二三・二四・三九・四五・一二三・一四七の七首は万葉と注記しているものの万葉歌ではないのだが、著者が万葉歌と認定しているものとして掲げておく。また一〇八には人丸の歌として「わきも子かねくたれかみをさるさわの池のたまもとみるめかなしさ」をあげるが、右の一覧からは除いた。差し引き十八首が実際の万葉歌ということになるのである。

次に『連歌寄合』についてもおなじように、引用された万葉歌をまず一覧してみよう。

- 1 8 56 川上のつらく／＼椿つらく／＼に見れ共あかずこせの春野は  
 2 0 930 むは玉の夜の更ゆけば楸生る清き川原に千鳥鳴也  
 2 2 1014 橘は実さへ花さへ其葉さへ枝に霜をけとましときはの木  
 2 3 450 ともの浦の磯のむろの木みんごとに逢見し妹は忘れめやは  
 3 622 はなれそにたてるむろの木うたかたも久しき年を過にける哉  
 3 8 3062 霰ふるかたの、原のなら柴のなれはまさらで恋ぞまされる  
 5 9 2335 やたの野の浅茅色づくあらち山峰の淡雪寒く降らし  
 1346 山高み夕日がくれの浅茅原後みんなにしめゆはましを  
 6 4 2274 道のべの蕙が本の思草今更何の物かおもはん  
 6 5 3086 大崎のありその渡りはふくずの行末もなくや思渡らん  
 8 3 (302) おく山のすがのねしのぎふる雪のけぬとかいはん恋の茂きに  
 3078 皆人のかさにぬふてふありま昔ありての後もあはんとぞ思  
 8 7 133 さ、の葉はみ山もさやにみだるめる我は物思ふ別れきぬれば  
 9 0 1295 かの岡に萩かるをのこしかなかりそ有つ、も君がきまさんみまぐさにせん  
 9 5 4486 ふなぎほふほり江の河のみなぎはに來あつ、鳴は都どりかも  
 9 9 378 みよしの、夏みの河の川よどに鴨ぞ鳴なる山陰にして  
 1 0 2 1835 朝霧にしと、にぬれてよぶこ鳥御舟山よりなき渡るみゆ  
 1 5 0 48 あづま野の煙のたてる所にてかへりみすれば月かたぶきぬ  
 1 6 1 858 玉島の此河上に家はあれど君をやさしみあらはさずありき

- 169 2755 湊入の蘆分小舟さはりおほみ我思人にあはぬ比かな  
 173 354 世中を何にたとへん朝ぼらけ漕行舟の跡のしらなみ  
 179 4482 鳩鳥の沖中河は絶ぬ共君とかたらふことつきめやは  
 180 1812 かつしかのまゝの井みれば立ならし水を汲けてこなしぞおもふ  
 201 133 篠の葉のみ山もさやにみだるめり我はいも思別きぬれば  
 205 272 旅にして物ぞ悲しき山本のあけのそは舟沖にこぐみゆ  
 211 7 秋の野に尾花かりふきやどれりし宇治の都のかりほしぞ思  
 220 1144 しながどりゐなのを行けば有馬山夕霧立ぬ宿はなくして  
 265 51 たをやめの袖ふき返す飛鳥風都を遠みいたづらに吹  
 267 503 神風やいせの浜荻折しきて旅ねやすらんあらき浜べに  
 282 1428 春の野に萇つみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにけり  
 285 1431 明日からは若菜つまんとしめし野に昨日も今日も雪はふりつ、  
 292 4080 堀江には玉しかましをみづがきの御舟こがんと兼てしりせば  
 294 255 ともし火の明石の浦の入日にやこぎわかれなん家のあたりみゆ  
 301 142 家にあればけにもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる  
 303 2200 しぐれの雨間なくしふれば槇葉もあらそひかねて紅葉しにけり  
 318 3829 あさか山かけさへみゆる山の井の浅くは人をおもふ物かは  
 322 63 いさや子らはや日の本へ大伴の三津の浜松まち恋ぬらん  
 325 141 石代の浜松が枝を引結びまさしくあらば今帰りこん

144 石代の野中にたてる結び松心もとけず昔思へば

3 3 4 (620) あしべよりみちくる塩のいやましに君に心を思ますかな

3 5 0 399 みちのくの真野のかや原遠けれど面影にしてみゆてふ物を

3 5 1 315 昔こそ難波る中といはれけれ今は都と備はりにけり

3 5 5 1147 さ夜更てほり江こぐなる松浦舟かち音たかしみをはやめかも

3 7 8 3577 枕香のこがのわたりのからかちの音たかしもなねなくねゆへに

3 8 3 924 和歌の浦に塩みちくればかたをなみ蘆べをさして田鶴鳴わたる

3 9 3 1155 大伴の三津の浦はを打さらしよりくる波の行末しらずも

4 1 2 505 夏野ゆく小鹿の角のつかのまも忘れず思ふいもが心を

4 1 6 2755 みなと入の蘆分小舟さわりおはき我思ふ人にあはぬ比かな

この『連歌寄合』においては、405番以降は木藤才藏氏蔵本によつての補遺によるということをまず念頭におきたい。右の四十八首(90は旋頭歌)を数えるのであるが、そのうち87と201、169と416は重出である。万葉歌については小字で和歌の上に「万」と記すのが原則のようだが、38・59の二首・87・95・99・169・180・211・220・265・282・285・292・294・318・325(この項は二首)・378・383・393・412・416の二十三首にこの注記を欠いている。これは全体の半数近くにのぼっている。万葉歌であることを確かめつつ記したものがどうか、いろいろと考えさせるところがある。83・334の二首は語句に異同があつて万葉歌と認定するのに躊躇するが万と記入がある。



『連珠合璧集』はもつとも大きな寄合集であり、当然ここにも万葉に基づく寄合が数多く収録されている。寄合の根拠として万葉歌が引用されている場合もあり、ただ寄合に「万」と注記されるのみの場合もある。その他注記はないものの、万葉に基づいていることに疑いのないものもある。編者は丁寧なそれらの万葉歌を頭注に指摘しており、筆者の概算では、百首にもおよぶ努力をはらっておられるのである。ただ万葉歌の認定にあたっては、さまざまの問題があり、どうしても主観的判断を迫られることになるので、ここでは実際に万葉歌を引用している場合と、「万」の注記がある場合に限って考察の対象としたい。万葉歌を引用しているのは次の三十二首（518は長歌から短歌形式に形を整えている）となるが、そのうち328と683、83と700は重出である。また「万」の注記がないが実際には万葉歌であるものが、39（新古今と注記）・70（古と注記）・86（新古今と注記）・100・165・247（古と注記）・454（古と注記）・486・518・633（後撰と注記）と十首あり、逆に注記がありながら万葉歌に見いだされないのが103（類歌だが、万葉歌ではあるまい）・222・519の3首である。

- 4 1096 鳴神の音にき、つ、まきもくの松原の山を今日見つる哉
- 23 2038 たなばたのいははた、て、をる布の秋さり衣誰かとり見る
- 39 2200 時雨の雨まなくしふれば横の葉もあらそひかねて色付にけり
- 70 1428 春の野にすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにけり
- 77 712 夕やみは道たどくし月待ちてかへれ我せこ其まにもみん
- 82 378 吉野なるなつみの川の川よどに鴨ぞ鳴なる山陰にして
- 83 272 旅にして物恋しきに山もとのあけのそは舟奥にこぐみゆ
- 86 2224 棹鹿の妻とふ山の岡べなる早苗はからじ霜はおくとも

- 1 0 0 1398 しほみてば入ぬる磯の草なれや見らくすくなくこふらくのおほき  
 1 0 3 (2778) 蘆鴨のさわぐ入江のしら浪の世にすみがたき我身也けり  
 1 2 3 3829 あさか山影さへみゆる山の井のあさき心を我がおもはなくに  
 1 6 5 884 あまさかるひなにいづとせすまいして宮このてぶり忘れにけり  
 2 1 2 1422 岩そゝぐたるひのうへの早蕨のもえ出る春にあひにける哉  
 2 2 2 みちのくのとふのすがごも七ふには君をねさせてみふに我ねん  
 2 3 0 1504 夏の野のしげみにさける姫ゆりのしられぬ恋はくるしき物を  
 2 3 2 524 庭にたつあさでかりほしきしのぶ東女を忘たまふな  
 1 79 夏そ引うなかみがたの奥津洲に鳥はすだけど君はおともせず  
 2 4 7 1355 月草に衣はすらん朝露にぬれてのちはうつろひぬとも  
 3 0 5 2624 あし引の山桜戸をあけおきて我まつ君を誰かとがむる  
 3 1 4 1014 橘はみさへ花さへ其葉さへ枝に霜をけとまし常盤にして  
 3 2 8 142 家にてはけにもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる  
 4 2 0 4518 水鳥のかもの羽色の青馬をけふみる人はかぎりなしといふ  
 4 5 4 3004 たちねの親のかふこのまゆごもりいぶせくもあるかいもにあはずて  
 4 8 6 1887 百敷の大宮人はいとまあれや桜かざして今日もくらしつ  
 4 9 5 3132 門たて、戸はさしたれど盗人のあぐる穴より入て見えけり  
 5 1 8 808 をとめ子も乙女さびすも唐玉をたもとにまきて乙女さびすも  
 5 1 9 わぎも子がねくれたれがみを猿澤の池の玉裳とみるぞかなしき

- 5 2 5 2205 妹がりと馬に鞍おき伊駒山打こえくれば紅葉散つ、  
 6 3 3 2313 はふり子が祝ふ社の紅葉はもしめをばこえて散といふものを  
 6 8 3 142 家があればけにもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる  
 7 0 0 272 旅にして物恋しきに山もとのあけのそは舟奥にこぐみゆ  
 7 4 3 3860 我がせ子がひたいにおふる双六のここの牛のつの、上のかさ

ついで注記に「万」とあるのみで歌は引かれていないのは以下の通りである。ここでは『合璧集』の編者の注記にしたがつて列挙する。

- 5 235 大君は神にしませば天雲の雷の上に廬らせるかも  
 3 1 3502 葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒き夕し汝をば偲ばむ  
 114 しなが鳥猪名野を来れば有馬山夕霧立ちぬ宿は無くして  
 1 1 0 56 河上のつらく椿つらくにみれどもあかずこせの春野は  
 2 1 4 1365 住吉の浅澤小野の杜若衣に摺りつけ着む日知らずも  
 5 0 1 61 丈夫のさつやたばさみ立向ひいるまとかたはみるにさやけし  
 6 6 5 1686 とこしへに夏冬ゆけや裘扇はなたず山に住む人  
 6 8 2 349 夜光る玉といふとも酒のみて心をやるにあにしかめやも  
 342 酒の名を聖とおほせし古の大き聖の言のよろしさ  
 7 8 5 242 おほ君は神にしませば槇のたつ荒山中に海をなすかも

1137 すめろぎの神の宮人まさきづらいやとこしきにわれかへりみむ

804 3808 春さらばかざしにせむとわがもひし桜の花は散りにけるかも

3809 妹が名にかけたる桜花咲かば常にや恋ひむいやとしのはに

806 こゝは 3813 の詞書からの引用

右の十三首を数えるが、806については、竹取の翁をいうものの詞書に現れる語彙であつて、歌は対象とならない。

『万葉詞』では寄合の根拠となる歌を記すことがあり、これは以上に掲げた三書と比較すべきものであるが、しかし、単に語彙を書き抜く時にも、また何のために記したかがわからないような時にも万葉歌を記すことがある。ここではそのすべての場合を列挙して抜き書きしてみた。なお解読できなかった文字は「\*」で示し、( ) に推定のよみを補った。まず寄合を示すための例である。

一四才

1192 山コエテトラツノハマノ岩ツ、シ我キタルマテフ、ミテ有マテ

一七ウ

1729 イニシヘノカシコキ人ノアソヒケンヨシノ、川原ミレトアカヌカモ

二七才

235 スヘロキハカミニシマセハアマ雲ノイカツチノ上ニ庵リスルカモ

二七ウ

243 滝ノ上ノ御船ノ山ニキル雲ノツネニアラントワカオモハナクニ

363 シホヒレハタマモカリツムイエノイモカ浜囊コハ、イカ、コタヘム

一一八ウ

256 天離夷ナカチヲ立クレハ明石ノトヨリ山ト島ミユ

257 ケヒノウミノニハヨクアラシカリコモノミタレテミユルアマノツリフネ

261 イツレカモ神サヒニケルカク山ノ鉾杉カモトニ苔ムスマテニ

一一九オ

267 クルシクモフリクルアメカミワノサキサノ、ワタリニ家モアラナクニ

268 近江海夕波千鳥ナカナケハ心モシノニ古オモホユ

269 ムサ、ヒハコスエモトムト足引ノ山ノサツホニアヒニケル哉

270 ワカセコカ古ノサトノアスカニハチトリナクナリマチカケカケカネテ

一一九ウ

273 桜田ヘタツナキワタルアユチカタシホヒニケラシタツナキワタル

275 イソサキヲコキタミユケハ近江ノ海ヤソノミナトニタツサハニナク

276 我舟ハヒラノミナトニコキ出ンオキヘナユキノサ夜フケニケリ

277 イツコニカワカヤトリセン高島ノカチノ野原ニ今日暮レヌレハ

一一〇オ

282 ワキモコニキナノハミセツナフキ山ツノ、松原イツカシメサン

284 シラスケノマノ、榛原往左来左君コソシラメ真野ノ萩原

292 アマノ原フリサケミレハ白真弓ハリテカケタル夜道ハヨケン

三〇七

295 ヒサカタノアマノサクメハイハフネノハテシタカツハアセニケルカナ

299 イホハラノキヨミカサキノミホノ浦ノ寛ニミエツ、モノ思モナシ

486 朝鳥ノネノミヤナカンワキモコニイマ、タサラニ逢ヨシモナシ

三十一

310 シノス、キクメノワカ子カイマシケンミホノイハヤハミレトモアカヌカモ

315 ムカシコソナニハキ中トイハレケメ今ハ宮人ソナハリニケリ

324 フシノネヲタカミカシコミアマ雲ノイユキハ、カリタナヒクモノヲ

333 藤ナミノ花ハサカリニ成ニケリ奈良ノ都ヲオモホスヤキミ

三十一  
ウ

349 ヨルヒカルタマトイフトモサケノミテ心ヲヤルニアニシヤマシヤ

355 アシヘナミタツノミナキテミナト風サムク吹ラシツオノサキハモ

359 ケフシカモアスカノ川ノユフサラスカハツナクセノキヨクアルラシ

三十一  
ホ

368 シホツヤマウチコエユケハワカノレル馬ソツマツク家コフラシモ

408 春日野ノアハマケリセハマタシカニツキテユカマシヲモリシルカラス

三十一  
フ

433 八雲サスイツモノコラカクロカミハ吉野ノ川ノ滝ニナツサフ

三三三オ

437 カサハヤノミホノ浦半ノ白ツ、シミレトモアカスナキ人オモヘハ

493 マノ、浦ノヨトノツキ橋心ユモオモヘヤイカニユメニシモミユル

三三三ウ

520 サカキニモテハフルトイフヲウツタヘ二人ツマトイヘハフレヌモノカモ

528 サホ川ノ小石フミワタリ夜干玉ノ黒馬ノクル夜ハトシニモアラヌカ

三三三オ

578 草香江ノ入江ニ求食葦タツノアナタツノ友ナシニシテ

591 白鳥ノ鳥羽山松ノマチツ、ソ我恋ワタルコノ月コロヲ

三三四ウ

596 君ニ恋イモニヘナミ榎山ノ小松カシタニ立ナケカモ

600 ウツ蟬ノ人目ヲシケミ石ハシルマチカキ君ニ恋ワタルカモ

629 キミニヨリコトノシケキヲフルサトノアスカノ川ニミソキシニユク

629 キミニヨクコトノシケキヲ立田コエミツノハマヘニミソキシニユク

三三五オ

652 夏葛ノタヘヌツカヒノカヨハネハコトシモアルコトオモヒフルカナ

699 家人ニ恋スキメヤモカハツナクイツミノサトノトシノヘヌレハ

三三五ウ

715 アチ酒ヲミワノハウリカイハフスキテフレッシュミカキミニアヒカタキ

727 アサカミノオモヒミタレテカクナクノコヒソモユメニミエケルハカリ

三六オ

763 打渡ス竹田ノ原ニナクタツノマナクトキナシワカコフラクハ

768 一重山カサナル物ヲ月夜ヨミ門ニ出タテイモカマツラム

782 板葺ノクロ木ノヤネハ山チカシアスモトリテハモチカヘリコン

三六ウ

783 クロ木トリカヤモカリツ、ツカヘヌト勤シリニキトホメントモアラス

807 シロカネモ金玉モナニセンニマサレルタカラコニシカメヤモ

821 梅ノ花サキタルソノ、アヲヤキハカツラニスヘクナリニケルカナ

三七オ

827 ムメノ花チラクハイツクシカスカニコノキノ山ニ雪ハフリツ、

828 梅ノ花チラマクオシキワカソノ、竹ノ林ニウクヒスソナク

831 春サレハコヌハカクレテウクヒスソナキテイヌナルムメカシツエニ

840 梅ノ花タオリカサシテアソヘトモアキタラヌ日ハケフニシ有ケリ

836 梅ノ花オリテカサセルモ口人ハケフノアヒタハタノシクアルヘシ

三七ウ

844 春柳カツラニオリシ梅ノ花タレカウカヘシサカツキノヘニ

851 ワカセカリイタクナチテクモマトククスリハムトモマタキヌヤモ

859 松浦川カハノセヒトリアユツルハタ、セルイモカモノスソヌレヌ



861 トヲツヒトマツラノ川ニワカユツルイモカタモトラワレコソマカメ

二八オ

905 トミ人ノ家ノコトモノキルミナシイタシスクラン絹綿ラハモ

二八ウ

913 年コトニカクモミチシカミヨシノ、キヨキカウチノタキツシラ浪

920 千鳥ナクミヨシノ川ノ音シケミヤトウキナンニオホユルキミ

932 足引ノ山ニモ野ニモミカリ人トモヤ手狭ミタレタルミユ

945 イナミ野ノアサチオシナミサヌル夜ノケナカクアレハイエシ、ノフル

二九オ

948 玉モカルヤラカノシマニアサリスル水鳥ニモアレヤイエヲオモハサラム

957 唐衣服櫓ノ里ノ島松ニ玉ヲシツケンヨキ人モカナ

960 サ、竹ノ大宮人ノ家トスムサホノ山ヲハオモフヤモキミ

二九ウ

962 去来児等カシイノカタニ白妙ノ袖サヘヌレテ朝葉摘テン

963 時風フクヘクナリヌカシキカタシホヒノキハニ玉モ茹テキ

965 ハヤヒトノセトノ般石モアユハシルヨシノ、タキニナヲシカスケリ

四〇オ

975 指杉ノクルスノ小野ノサ、ケノ花チリナンノチニユキテタムケン

985 アマカクレミカサノ山ヲタカシカモ月ノイテコヌ夜ハフケヌツ、

四〇ウ

996 石ハシルタキチナカル、泊瀬川タユル事ナク又モキテミム

1007 コマノアユミシハシト、メヨスミヨシノキシノ黄土ニ二ホヒテユカン

四一オ

1009 ヲシホエスキマオルキミヲサホカハノカワツキカセテカヘシツルカモ

1011 神世ヨリヨシノ、宮ニアリカヨシタカクシレルハヤマカハヲヨミ

1014 タチハナハ実サヘ花サヘソノ葉サヘ枝ニ霜ヲケトマシ常盤木

四一ウ

1027 大サキノ神ノ大浜ハセハケレハ百船純モスクトハナクニ

四二オ

1041 イマツクル国ノ都ハ山川ノキヨクミユレハウヘシカルヘシ

1042 古郷ハトラクモアラス一重山コユルヤ、ラニ恋ソワカセシ

1048 紅ニフカクソミニシ心カモナラノ都二年ノヘヌヘキ

四二ウ

1050 イハツナノマタワカエツ、アオニヨシナラノ都ヲ又シミシカモ

1058 イツミ川ユクセノ水ノタヘハコソ大宮トコロウツリモユカメ

1060 オトメラカ績麻カクトイフカセノ山トキノヨケレハミヤコトナリヌ

1061 鹿背山コタチヲシケミアサ、ラスナキヲトヨマスウクヒスノ声

四三オ

1062 狛山ニナクホト、キスイツミ川ワタリヲトヲミコ、ニカヨハス

1064 ミカノ原クニノ都ハアレニケリ大宮人ノウツリイヌレハ

1068 シホヒレハアシヘニサハリ白鶴ノツマヨフ声ハミヤモト、ロニ

四三ウ

1077 玉タレノ小簾ノマトヲシ独キテミルシルシナキ夕月夜カモ

1081 ウハタマノヨワタル月ヲト、メンニシノ山ヘニ塞モアラヌカモ

1083 マスカ、ミテルヘキ月ヲ白妙ノ雲カ、クセルアマツキリカモ

四四オ

1103 片岡ノムカヒノミネニシキマカハコトシノナツノカケニナラハン

1108 コマナメテミヨシノ川ヲミマホシミウナコヘキテハタキニアソヒツル

四四ウ

1109 音ニキ、目ニハマタミヌ吉野川ムツタノヨトヲ今日ミツルカモ

1111 ハツセ川白木綿花ニ落タキツセキヨキアトヲミニコシワレヲ

1124 ミヨシノ、青根カ峯ノ苔ムシロタレカオリケンタテヌキ\*ニ

四五オ

1125 イモカクトワカ、ヨヒチノシノス、キワレシカヨハ、ナヒケシノハラ

1126 山キハニワタルアキサノユキテキンソノカハノセニナミタツナユメ

1130 年モイマタヘサルニアスカ川セ、ニワタシ、イシハシモナシ

四五ウ

1133 琴トレハナケキサキタツケタシクモ琴ノ下樋ニツマヤコモレル

1138 吉野川イハトカシハノトキハナシワレハカヨハムヨロツ代マテハ

1140 ウチカハニオフルスカモヲカハ、ヤミトラテキニケリツトニセマシヲ

四六オ

1143 チハヤ人宇治川ナミヲキヨミカモタヒユク人ノタチカテニスル

1147 サ夜フケテホリエコクナルマツラ舟カチ音タカシ水尾ハヤミカモ

1150 メツラシキ人ヲ我家ニ住吉ノ岸ノハニツチミンヨシモカモ

1157 \* \* (住吉) ノナコノハマヘニムマタテ、タマヒロヒシクツネワスラレス

四六ウ

1160 住吉ノ遠里小野ノ真榛モテスレル衣ノサカリスキユク

1164 難波カタシホヒニタチテミワタセハアハチノ島ニタツナキワタル

1166 円方ノミナトノストリナヨタテハツマコヒタテ、ヘニテカツクモ

1176 イツコニカフネノサシケンタカシマノカトリノ浦ニコキイタル舟

四七オ

1177 ヒタ人ノマキナカステフニフノ川コトハカヘストフネソカヨハヌ

1182 イナミノハユキスキヌラムアマツタフヒカサノ浦ニナミタテルミユ

1183 家ニシテワレハコヒンナイナミノ、アサチカ上ニテラス月夜ヲ

1189 朝ナキニマカチコイテ、ミツ、コシミツノ松原ナミコシニミユ

1190 \* \* \* (アサリス) ルアマオトメコカ袖トホリヌレニシ衣ホセトカハカヌ

四七ウ

1192 山越テトホツノハマノ岩ツ、シ我カキタマテツ、ミテアリマテ

1193 大海ハアラクナフキノシナカトリキナノ水ウミ舟トムルマテ

1210 イモカタメ玉ヲヒロフトキノ国ノユラノミサキニコノ日クラシツ

1226 アハ島ニコキワタラント思ヘトモアカシノトナミイマタサハケリ

四八オ

1179 夏麻ヒク引海上瀬ノオキツスニ鳥ハスタケト君ハヲトモセス

1230 三輪ノサキアライソモミエス波立テイツコヨリユカンキミチハナシニ

1234 \* \* \* \* (チハヤフル) カネノミサキラスクルレトモワレハワスレスシカノスメ神

四八ウ

1235 \* (天) 霧アヒヒカタフクラシ水クキノ岡ノミナトニ波タチワタル

1240 夢ニノミツキテミユレハサ、島ノイソコスナミノシク、オモホユ

1261 ミチノヘノ草深ユリハハナエミニエミセシカラニツマトイハマシヤ

四九オ

1267 足引ノ山ソハキサクカツホコエ

1267 アナシヤマツハキサケリヤ峯コシニシヤマツキミカイハヒツマカモ

1266 暁トヨカラスナケトコノ山ノコスエノウヘハイマタシツケシ

1269 コトシユクニサシマモリノアサ衣カタノマヨヒハタレカトミン

四九ウ

1319 タチハナノシマニシオレハ川トウミサラサテヌヒシワカ下衣

五〇オ

1335 石畳カシコキ山トシリツ、モワレハコフルカトモナラナクニ

1339 思ヒアマライトモスヘナミ玉タスキ雲トフ山ニワレシメムスフ

1348 \* \* \* \* (マトリス) ムウナテノモリノスカノネヲキヌニスリツケキセンコモカナ

五〇ウ

1350 \* \* (ヲミ) ナヘシオフルサハヘノマクス原イツカモクリテワカキヌニキン

五一オ

1396 ムラサキノナタカノ浦ノ愛子地袖ノミヌレテネスハアラナン

1408 カ、ミナスワカミシキミヲアハノ野ノハナタチハナノ玉ニヒロヒツ

1417 ニハツトリカケノタレヲノミタレヲノナカキ心ヲオモホエス君

五一ウ

1423 神ナヒノイハセノモリノヨフコトリイタクナ、キノ我恋マサル

1425 立山ノサキノヲスクロニワカナツムイモカシラヒモシラクシヨシモ

1432 忍照ヤナニハラスキテ打ナヒククサカノ山ヲクレニワカコユ

五一オ

1435 クタラノ、ハキノフル枝ニ\* (春) マットスミレウクヒスナキニケンカモ

1437 ウチノホルサホノカハラノ青柳ハイマハ春ヘトナリニケルカモ

五一ウ

1438 霜雪モイマタスキネハオモハスニカスカノサトニムメノハナミツ

1439 カハツナクカミナヒ川ニカケミエテヤマカサクラムヤマフキノ花

1448 山フ\*（キ）ノサキタル人ノツホスミレコノ春雨ニサカリナリケリ

五三〇

1453 ツハナヌクアサチカ原ノツホスミレイマハカリナリワカコフラクハ

1470 カミナヒノイハセノモリノホトトキスナラヒノ岡ニイツカキナカン

五三一

1517 ケサノアサケ鷹カネキ、ツ春日山モミチニケラシワカ心イタシ

1532 カスミタツアマノカハラニ君マツトユキカヘルマニモノスソヌレヌ

五四〇

1534 オミナヘシアキハキマシヘアシキノ、今日ヲハシメテ万代ニミン

1538 オミナヘシアキノハキヲレ玉ホコノミチユキツト、コハンコノタメ

1540 \*\*（EII）アヒテアサカホハツルカクレノ、ハキハチリニキモミチハヤツケ

五四〇

1477 \*\*（タチ）ハナノ花チルサトノホト、キスカタコヒツ\*クナク日シハオホキ

五五〇

1543 アキノ日ノ穂田ヲカリカネクラヤミニヨノホトロニモナキワタルカモ

1544 ケサノアサケカリカネサムミキ、シナヘ野ヘノ浅茅生色ツキニケル

1549 タナハタノ袖続ヨルノ暁ハカハセノタツハナカストモアレ

五五ウ

1555 \* (時) マチテオツルシクレノ雨ヤミテアサカノ山ノウツロヒスラム

1562 ウツラナクフリニシサトノ秋萩ヲオモフ人共アヒミツルカモ

1570 ヒサカタノアマ、モオカス雲カクレナキソユクナルワサタカリカネ

五六オ

1639 サホ川ノ水ヲセキアケテウエシ田ヲカルハツ飯ハヒトリナルヘシ

1609 \*\* (タカ) マトノ野ヘノ秋萩此比ノアカツキツユニサキニケンカモ

五六ウ

1614 \*\*\* (タカマ) トノ秋ノ野上ノトコ夏ノ花サカリミシ人ノカサセルトコナツノ花

寄合を示すのではない場合は、つぎのとおりである。

八ウ

261 イツシカト神サシニケルカコ山ノムスキカモトニ苔ノムスマテニ

一一オ

805 久方ノ天路ハトヲモナヲ／＼ニイエニカヘリテナリヲシマサニ

一一ウ

814 イカニカモ日ノ時ニカモコエシラン人ノヒサノエワカマクラカモ

一一オ



858 玉島ノ此川上ニ家ハアレト君ヲヤシサミアラハサスアリキ

一一ウ

910 ワカケレハ道ユキシラシマイハセンシタヘノツカヒライテトララセ

一五ウ

1423 神ナヒノイハセノ森ノヨフコ鳥イタクナ、キノワカ恋マサル

一六オ

1455 水鳥ノカモノ羽色ノ春山ノオホツカナクモオホ、ユルカナ

1469 時鳥イタクナ、キノ汝声ヲ五月ノ玉ニ相貫カ如シ

1474 物ノフノイハセノ森ノホト、キスイマモナカヌカ山ノトカケニ

1489 夏マケテサキタルハネス久方ノ雨ウチフラハウツロヒナンカ

一六ウ

1549 七タノ袖ツク夜ルノアカツキハ川セノタツハナカストモヨシ

一七オ

1686 トコシヘニ夏冬ユケヤ蓑扇ハナサス山ニスム人

一七ウ

1742 シナカトリ安房ニツキタルアツサ弓

一八ウ

1846 雪ヲ、キテ梅ヲナコヒソ足引ノ山カタツキテ君キセル君

1903 春サレハ卯ノ花クタシ我コエシイモカ垣間ハアレニケルカモ

一九オ

2227 アメノ海ニ月ヲウカヘテ桂梶カケテコクミユ月人ヲトコ

2265 ハツセ風カクフク夜半ニイツマテカ衣カタシキワカヒトリネム

2350 ウカラフトミル山雪ノイチシロク立ハイモカ名人シラレカモ

一〇オ

2978 紅ノウスソメ花アサハヤミアヒミシ人ニコフルコノ比

2982 モ、ソメノアサヲノ衣アサハカニオモヒテイモニアハム物カモ

一〇ウ

2994 ハリハアレトモシナケレハツケメヤト我ヲナヤマシタユルヒモノヲ

一一一オ

3524 アサカ、タシホヒノユタニオモヘラハウケラカ花ノイロニイテヌカモ

一一七オ

236 オホ君\*上ニシマセハ雲カクレイカツチ山ニ宮ヒキイマス

一一七ウ

241 久賢ノアメ行月ヲアミニサシ我大宮ハキヌアセニセリ

242 スヘロキハカミニシマセハマキノタツアラ山中ニ海ヲナスカモ

361 ムロノ浦ヲコキ転小舟アハシマヲ背ニミツ、トモシキヲフネ

一一八オ

247 アシキタノ野坂ノ浦ニ舟出シテシマニユカンナミタツナユメ

383 木綿疊手ニ取りモチテカリタニモワレハコヒナンキハアハシカモ

248 オホフナミヘナミタツトモワカセコカ三舟ノ泊リ波タ、ヌカモ

250 水浅キ波ヲカシコモリエノ舟コク君カ行カタノシマニ

251 玉モカルミヌメヲスキテ夏草ノ野島カサキニフネチカツキヌ

252 粟路ノ野島カサキノ浜風ニイモカムスヒシヒモフキカヘス

一一八ウ

253 アラタエノフチエノ浦ニイサリスルアマトヤイハンタヒユクワレヲ

254 イナヒ野ハ行スキカテニオモヘレハ心コヒシキカコノ島ミユ

258 室ノ浦ノトマリニハアラシイサリスルアマノツリ舟浪間ヨリミユ

264 伊駒山木立モミヘスチリマカフ雪モハタラニアシタ、ノシモ

一一九ウ

274 ヨモカマヲウチコエクレハカサヌヒノ島コキカクルタナ、シホフネ

278 イモ、ワレモ一ナルカモ三川ナルフタミノミチニワカレカネツル

280 トクキテモミテマシモノヲヤマシロノタカツキムラニチリニケル哉

一二〇オ

286 スミノエノエナツニタチテミワタセハムコノ浦ヨリ出ル舟人

一二〇ウ

301 マツチ山ユフコエユキテイホサキノスミタ川原ニヒトリカネモネン

一二一エ

337 ワスレクサ我ヒモニツクカクヤマノフリニシサトヲワスレヌカタメ

||||ト

367 マスラオノユスエフリオコシサツル箭ヲノチミン人ハカタリツケカネ

373 雨降テトノクモル夜ノヌレシカト恋ツ、オリキキミマチカテラ

380 青山ノ峯ノ白雲アサニケニツネニミレトモメツラシ我君

392 島ツタヒトシマカサキヲコキタメハヤマトコヒシクタツサハニナク

||||ト

416 スマノアマノシホヤキヌノ藤服マ遠ニシアレハイマタキナレス

425 イソノカミフルノ山ナル杉村ノ思スクヘキ君ニアラナクニ

427 コモリクノハツセオトメノ手ニマケル玉ハミタレテ有トイハシヤモ

||||ト

498 朝日影ニホフル山ニテル月ノアカスヤ君ヲ山コシニオキテ

506 珠衣ノサイ／＼シツミイエノイモニモノイハスキテ思ヒカネツモ

||||ト

522 雨障ツネスルキミハ久賢ノヨンヘノアメニ懲ニケンカモ

527 蒸被マコヤカシタニフセレトモイモトシネ、ハ肌サムシモ

||||ト

543 我セコニマタハアハシトオモヘハカケサノワカレノ為便ナカリツル

564 オモハヌヲオモフトイハ、大野ナルミカサノモリノ神モシルラム

三五オ

635 目ニハミテ、ニハトラレヌ月ノ中ノ楓ノコトキイモヲイカニセム

678 女郎花サクサハニオフルハナカツミミヤコモシラヌコヒモスルカナ

三五ウ

691 青山ヲヨコキル雲ノイチシロクワレトミエシテ人ニシラルナ

713 ミ空ユク月ノ光ニタ、一目アヒミシ人ノ夢ニシモミユル

二六オ

746 我恋ハ手引ノ石ノ七ハカリクヒニカケテリカミノモロフレ

二六ウ

819 ムツキタチ春ノキタラハカリシコリムメヲオリツ、タノシキヲヘヌ

825 アヲ柳梅トノ花ヲオリカサシノミチノ、チハチリヌトモヨシ

二七オ

830 打ナヒク春ノ柳トワカヤトノムメノハナトライツレカワカン

二八オ

869 君ヲマツ松浦ノ浦ノ乙女ヲハトコヨノ国ノアマヲトメカモ

871 キミカユキケナカクナリヌナラ路ナルシマノコタチモカムサヒニケリ

874 モ、カシモユカヌマツラチ今日ユキテアスハキナンソナニカサヤレル

878 ウナハラノオキユクフネヲカヘルトカヒレフリシケンマツラサヨヒメ

二八ウ

942 行歸リミレトモヤカンヤナクスミノフナセノハマニシキルシラ浪  
三九オ

949 島カクレワカコキクレハトモシカモヤマトヘノホルミクマノ、船  
三九ウ

964 行歸リ常ニワカミシカシイカタアスヨリノチニハモルヨシナシ  
四〇オ

981 ナニハカタシホヒノナコリマクハシミイエナルイモカマチトハンタメ

988 山ノハノ左佐良榎壮子アマノ原トワタルヒカリミラクシヨシモ

990 アメニマス月ヨミヲトコマヨハセン今夜ノナカサ五百夜ツキコソ

四〇ウ

993 春草ハノチハカルトモイツクシクトキハニマサレタカキワカキミ

999 振仰テ三日月ミレハ一目ミシ人ノマヨキノオモホユルカモ

四一オ

1016 我ヤトノ梅サキタリトツケヤラハコテフニ、タリチリヌトモヨシ

四一ウ

1028 長門ナルオキツカクシマラクマヘテワカオモフ君ハチトセニモカモ

1032 大夫ノタカマト山ヲセメクレハサトニヨリタルムサ、ヒノ声

四二オ

1047 玉キハルイノチハシラス松カ枝ラムスフコ、ロハナカクトソオモフ

四二ウ

1055 ミカノ原布当ノ野ヘヲキヨミコソ大宮所サタメケラシモ

四二オ

1071 ハマキヨクウラ愛モ神代ヨリチフネノトマル大和太ノハマ

四二ウ

1072 アメノウミ雲ノナミタチ月ノ舟ホシノハヤシニコキカクルミユ

1074 マスラオノユスエフリタテカクタカノ野ヘサヘキヨクテル月夜カモ

四四オ

1087 霜クモリストニカアラン久方ノ夜ワタル月ノミエヌ思ハ

1102 木道ニコフイモ山アリトカツラキノカミノニカミ山モイモコソアリケレ

1104 マキモクノアナシノ川ヲ行水ノタユルコトナク又婦リミン

四四ウ

1114 ユタネマクアラキノ小田ヲモトメント足結ハヌレヌ此川ノセニ

1116 ハネカツライマスルイモヲウラワカミコチコセ川ノヲトノサヤケサ

1118 我ヒモライモカ手モチテ結ハツ又カヘリミン万代マテニ

四五オ

1129 キヨキセニチトリツマヨヒ山ノハニカスミタツラムカミナヒノサト

四六オ

1141 氏人ノタトヒノ足白我ナクニイマハキミヲソ木続コストモ

四七オ

1180 コトハカへ箱根トヒコエ行タツノトモシソミレハヤマトシオモホユ

四七ウ

1196 \* (白) 妙ニ、ホフマツチノ山川ニフカムマナツムイエコフラシモ

1198 人ナラハオヤノ思コソアサモヨヒキノ川辺ノイモトセノ山

四八オ

1232 風ハヤノミホノ浦ハヨコク舟ノ舟人サハクナミタツラシモ

1233 我舟ハ明石ノ浜ニコキトメンオキハハナルナサ夜フケニケリ

四八ウ

1242 竹島ノアトシラ浪ハトヨメトモワレハイエオモフィホリヤナシモ

1264 トキナラヌマタラ衣ノキマホシミカコロモ釘ハウトキニアラストモ

四九オ

1276 \*\*\* (タチノシ) リサヤニイル、ノニカツラクル我イモマソテ\* (モテ) キテムトテカモナツクサカルモ

四九ウ

1302 \*\*\* (千名ニ) 人ハイフトモヨリオカンワカハタモノ、白アサコロモ

1304 オチコチノイソナカニアル白玉ヲ人ニシラセウミルヨシモカモ

1326 イセウミノアマノシマツカ鮑トリテノチカモコヒノシケ、ン

五〇オ

1344 ムラサキノ糸ヲソ我ヨルアシ引ノヤマタハナヲヌカントオモヒテ



五〇ウ

1363 カノ岡ノワカ楓木ノシツエヨリハナマツイマニナケキツルカモ

1365 スミヨシノアサ、ハ小野ノカキツハタキヌニスリツケキム\*（ヒ）シラスモ

1376 ミ空行月ヨミオトコユフサラス月ニハミレトモヨルヨシモナシ

五一オ

1404 島ツタフアシハヤノ小舟風イツトトシハヤヘナンアフトハナシニ

1419 \*\*\*（タマツサノ）イモハ玉カモ足引ノキヨキ山ヘニマケハチリヌル

五二オ

1436 ワカセコカミナレサホチノ青柳ヲタヲリテタニモミルイロニカモ

五二ウ

1447 霞タツ野上ノカタニユキシカハウクヒスナキツ春ニナルラシ

五三オ

1481 \*\*（ウノ）花モイマタサカネハホト、キスサエノ山ヘニキナキトヨマス

五三ウ

1501 \*\*\*（ツクハネ）ニワカ\*（ユ）ケリセハ郭公山ヒコトヨメナカマシカハレ

1518 秋萩ハサキヌヘカラシ我ヤトノアサチカハナノチリユクミレハ

1520 秋山ニモミツ木ノ葉ノウツロヘハサラニヤ秋ヲミマホシミセン

五四ウ

1541 秋ノ野ニサキタル花ヲ手ニトリテカキカソフレハ七種ノハナ

1542 萩カ花小花クス花ナテシコノハナオミナヘシマタフチハカマアサカホノ花

1503 コトシケミキミハキマサスホト、キス汝タニキナケ朝戸ヒラカン

五六オ

1591 足引ノ山ノ紅葉、今夜モカウキテイヌラン山カハノセニ

1608 秋サレハカスカノ山ノモミチミルナラノミヤコノアルクラシモ

五六ウ

1618 長月ノソノ初鴈ノツカヒニモオモフコ、ロハキコエコヌカモ

1627 我ヤトニモミチル蜘蛛手ミルコトニイモヲカケツ、コヒヌ日ハナシ

1644 我岡ニサカリニサケルムメノ花ノコレルユキヲマカヘツルカモ

五七オ

1654 池辺松ノ末葉ニフル雪ハ五百重フリシケアスサヘモミン

1659 高山ノスカノハシノ木フル雪ノケヌトカイフモコヒノシケ、ク

1664 梅花チラス冬風オトニノミキ、シワキモコミラクシヨシモ

以上のうち、1276 1542 は旋頭歌、1639 は連歌、1742 は長歌の一部である。一部に異読を記しているのであるが、二つの場合を併せて全部で二百八十七首を数えておいた。なお一五ウと五一ウで 1423 が重出している。

これらの寄合集と『万葉詞』に引用された万葉歌を比較してそれぞれの特徴を見いだすことができるであろうか。まず、和歌を引き、寄合を示し、連歌の実作を示すという点で共通の体裁を備える『連証集』と『連歌寄合』を見ると、万葉の 51 272 378 924 1144 の五例が共通の引用である。それぞれ「いたつら あすか」「飛鳥風 いたづら」「山中（もと）あけのそほ舟」、「かものなく 山かけにして」「鴨 山陰」、「ゐなの山もと やとはなくして」「宿なき 猪名野」というように寄合を掲げていて、各語の切り詰めかたに違いはあっても、本質的な一致を見ることが出来る。924 は「和歌の浦 たつのなく」に対して、『連歌寄合』はふさわしい寄合をしめていない。また『合璧集』も 272 378 を共有し、1144 は「万」の注記をして同じ歌に基づく寄合を示している。

『合璧集』と『連歌寄合』の間でも、56 142 1014 1428 がそれぞれ次のように寄合を共有している。「河上 つらつら つばき」「椿 川上」、「飯 椎の葉」、「橘 枝に霜おけ」、「一夜 堇つむ野べにねて」。なお 2200 は『合璧集』が、歌中の語を取るのに対し、『連歌寄合』は「あらそふ」に対し「時雨」を寄合とし、3829 も『合璧集』が歌の中の語を寄合に取るのに対して、『連歌寄合』は歌の父母の概念をもちいていて、異なった寄合になっている。以上の三種の寄合集はそれぞれ万葉歌を二十首から四十首程度引用するのであるから、そのうちで共通する歌が十首ほどあるのはかなりの頻度といわなければならない。

次に『万葉詞』とこれらの寄合集を比較してみるとかなり異なる数値が現れる。上記三種の万葉歌はのべ約百首で、巻一から巻二十まで、まんべんなくちらばっている。引用が見られないのは、巻十三、十七、十九の三巻にすぎない。それに対し『万葉詞』は、二百八十首あまり、多くが巻三から巻八にかたまっており、次に巻九、十、十二、十四の歌がわず

かばかりあるというかたよった分布を示している。その両者をくらべるとどのようなようになるだろうか。

まず『連証集』との比較をこころみると、万葉1061によつて、「国ノ都 山川」「山かは 国のみやこ」という寄合が共有され、その他に256 869の二首が共通するが、866は「明石ノ浦 ヒナノナカチ」に対し「やまとしま あかしのとまり」、869のほうは『万葉詞』では寄合をとつておらず、こちらにはかならずしも完全な一致とは言いがたい。

『連歌寄合』との共通歌は、315 858 1014 1147と四首あるが、一致するのは1147にもとづく、「舟のかち音に堀江とも松浦共付」の一例のみである。その他は315については、「る中 難波」に対し、『万葉詞』は「難波 宮人」と寄合をとり、1014については「橘 実さへ花さへとも、ときは木」とあるのに、「橘 枝二霜オケ」とあつてこれも寄合のとりかたは一致しない。

三番目の『連珠合璧集』について『万葉詞』との一致した寄合をさぐると、1014にもとづく「橘 枝二霜オケ」の一例のみである。『合璧集』において「万」と注記するのみの例に対象をひろげると『万葉詞』との共通歌は五首を数えるが、内容を見ると、242 1635 1686は『万葉詞』寄合なし。235は『合璧集』「いかづちアラバ 岡 あま雲」にたいし、「イカツチ イホリ」で同一の歌から異なる寄合を検出している。349は両者「酒 夜ひかる玉」で一致している。結局『連珠合璧集』全体で一致するものは、1014 349の二例のみということとなる。以上の比較検討の結果、『万葉詞』は二百八十あまりの歌数という分量がありながら、他の寄合集との一致例がはなはだ少ないように思われる。

それぞれの寄合集にどのような特徴があるかさぐるべく、集中の万葉歌と勅撰集との共通歌を調べ、表を作ってみた。ただし万葉歌にあつては、時代による訓みのゆれがはなはだ大きいこと、また勅撰集に採られているような歌については、引用者が万葉と勅撰集とのどちらを出典と意識しているかが必ずしも明らかでなく、この作業にはさまざまな誤差を覚悟しなければならない。はじめに『連証集』引用の万葉歌についての調査を表一に示す。

表一 連証集

五〇	四五	三九	三五	三三	二四	二三	二三	二二	二〇	六	四	連証集
924			869	78				3600	1734	431	51	万葉
続古今 1634	古今序 439			新古今 896	続古今 1162				新古今 1589		続古今 938	勅撰集

一四九	一四七	一四三	一四二	一三八	一三二	一三一	一二三	一二八	一二七	八三	六六	六五
256		3487	1041	272	4	2318		1144	266	2281	378	500 1122
新古今 899				続古今 927			新古今 1432	新古今 910	新古今 1650	新古今 346	新古今 654	拾遺 491

ついで『連歌寄合』の例である。

表二 連歌寄合

65	64	全	59	38	全	23	22	20	18	連歌寄合
3086	2274	1346	2335	3062	3622	450	1014	930	56	万葉
	続後拾遺 631		新古今 657	新古今 1050		新勅撰 1323		新古今 641		勅撰集

173	169	161	150	102	99	95	90	87	全	83
354	2755	858	48	1835	378	4486	1295	133	3078	(302)
拾遺 1327	拾遺 853		玉葉 1124	風雅 127	新古今 654		拾遺 567	新古今 900	拾遺 858	古今 551

303	301	294	292	285	282	267	265	220	211	205	201	180	179
2200	142	255	4080	1431	1428	503	51	1144	7	272	87 の 重 出	1812	4482
新 古 今 582			続 千 載 1637	新 古 今 11	続 古 今 序 160	新 古 今 911	続 古 今 938	新 古 今 910	新 勅 撰 496	続 古 今 927			新 勅 撰 938

416	412	393	383	378	355	351	350	334	全	325	322	318
169 の 重 出	505	1155	924	3577	1147	315	399	620	144	141	63	3829
	新 古 今 1374		続 古 今 序 1634		続 古 今 1642		新 千 載 1236		拾 遺 854		新 古 今 898	古 今 序

【連珠合璧集】についても同じ形式の表を作ってみた。ただし、「万」の注記をもつだけのものは、うしろに一欄をあけて記してみた。

表三 連珠合璧集

100	86	83	82	77	70	39	23	4	連珠合璧集
1398	2224	272	378	712	1428	2200	2038	1096	万葉
拾遺 967	新古今 459	続古今 927	新古今 654	新勅撰 881	続古今序 160	新古今 582		拾遺 490	勅撰集

305	247	全	232	230	222	212	165	123	103
2624	1355	1179	524	1504		1422	884	3829	2778
続後拾遺 802	拾遺 474	古今 247		続後拾遺 633		新古今 32		古今序	新古今 1707



743	700	683	633	525	519	518	495	486	454	420	328	314
3860	83 の 重 出	328 の 重 出	2313	2205		808	3132	1887	3004	4518	142	1014
			拾 遺 1135		拾 遺 1289			新 古 今 104	拾 遺 895			

806	全	804	全	785	全	682	665	501	214	110	全	31	5	
万 葉 3813 歌 詞 書 に よ る	3809	3808	1137	242	342	349	1686	61	1365	56	1144	3592	235	
									続 後 拾 遺 141		新 古 今 910			

【万葉詞】の表は、寄合をとともなう万葉歌を四一とし、語彙を示すのみの歌は四一として別建てにしてみた。

表四一

全	全	全	二九才	全	全	二八ウ	全	二七ウ	二七才	一七ウ	一四才	万葉詞
270	269	268	267	261	257	256	363	243	235	1729	1192	万葉
		続後拾遺 457	(続古今 1923)	新勅撰 500		新古今 898						勅撰集

全	全	全	三才	全	全	三〇ウ	全	全	三〇才	全	全	全	二九ウ
333	324	315	310	486	299	295	292	284	282	277	276	275	273
										新勅撰 499		玉葉 1226	

全	三五才	全	全	三四ウ	全	三四才	全	三三ウ	全	三三才	三三ウ	全	三三才	全	全	三三ウ
699	652	629	600	596	591	578	528	520	493	437	433	408	368	359	355	349
						続 後 撰 1320							風 雅 945			

全	全	全	三七ウ	全	全	全	全	三七才	全	全	三六ウ	全	全	三六才	全	三五ウ
861	859	851	844	836	840	831	828	827	821	807	783	782	768	763	727	715
							風 雅 56							玉 葉 1328		

四一才	全	四〇ウ	全	四〇才	全	全	三九ウ	全	全	三九才	全	全	全	三八ウ	三八才
1009	1007	996	985	975	965	963	962	960	957	948	945	932	920	913	905
		続後拾遺 974		続千載 392			新勅撰 494								

四三ウ	全	全	四三才	全	全	全	四二ウ	全	全	四二才	四一ウ	全	全
1077	1068	1064	1062	1061	1060	1058	1050	1048	1042	1041	1027	1014	1011
		新勅撰 1267											

四六才	全	全	四五ウ	全	全	四五才	全	全	四四ウ	全	四四才	全	全
1143	1140	1138	1133	1130	1126	1125	1124	1111	1109	1108	1103	1083	1081

全	四七ウ	全	全	全	全	四七才	全	全	全	四六ウ	全	全	全
1193	1192	1190	1189	1183	1182	1177	1176	1166	1164	1160	1157	1150	1147
						新千載 1189			続古今 1636				続古今 1642

全	五 〇 才	四 九 ウ	全	全	四 九 才	全	全	四 八 ウ	全	全	四 八 才	全	全
1339	1335	1319	1269	1266	1267	1261	1240	1235	1234	1230	1179	1226	1210
													新 勅 撰 1326

五 三 才	全	全	五 二 ウ	全	五 二 才	全	全	五 一 ウ	全	全	五 一 才	五 〇 ウ	全
1453	1448	1439	1438	1437	1435	1432	1425	1423	1417	1408	1396	1350	1348
						続 古 今 917							

表四―二

一二才	一一ウ	一一才	八ウ	万葉詞
858	814	805	261	万葉
				勅撰集

五五才	五四ウ	全	全	五四才	全	五三ウ	全
1543	1477	1540	1538	1534	1532	1517	1470
	続古今 252					風雅 552	新勅撰 145

全	一六才	一五ウ	一二ウ
1469	1455	1423	910

全	全	五六才	全	全	五五ウ	全	全
1614	1609	1639	1570	1562	1555	1549	1544
	玉葉 494						続後撰 314

二三オ	二〇ウ	全	二〇オ	全	全	一九オ	全	一八ウ	一七ウ	一七オ	一六ウ	全	全
3524	2994	2982	2978	2350	2265	2227	1903	1846	1742	1686	1549	1489	1474

全	二九ウ	全	全	全	二八ウ	全	全	全	全	全	二八オ	全	全	二七ウ	二七オ
278	274	264	258	254	253	252	251	250	248	383	247	361	242	241	236
	古今 1073		玉葉 2107			玉葉 1224	新拾遺 759				続後撰 1321				



三四才	全	三三ウ	全	三三才	全	全	三三ウ	全	全	全	三三才	三三ウ	三〇ウ	三〇才	全
543	527	522	506	498	427	425	416	392	380	373	367	337	301	286	280
								玉 葉 1225					新 勅 撰 501	続 後 撰 1022	新 拾 遺 1680

四〇才	三九ウ	三九才	三八ウ	全	全	全	三八才	三七才	全	三六ウ	三六才	全	三五ウ	全	三五才	全
981	964	949	942	878	874	871	869	830	825	819	746	713	691	678	635	564
															新 勅 撰 953	続 古 今 1204

全	全	四四才	全	四三ウ	四三才	四二ウ	四二才	全	四一ウ	四一才	全	四〇ウ	全	全
1104	1102	1087	1074	1072	1071	1055	1047	1032	1028	1016	999	993	990	988
				拾遺 488			続古今 1754			続千載 52				

四九ウ	四九才	全	四八ウ	全	四八才	全	四七ウ	四七才	四六才	四五才	全	全	四四ウ
1302	1276	1264	1242	1233	1232	1198	1196	1180	1141	1129	1118	1116	1114
					玉葉 2080								

全	全	五三ウ	五三才	五二ウ	五二才	全	五一才	全	全	五〇ウ	五〇才	全	全
1520	1518	1501	1481	1447	1436	1419	1404	1376	1365	1363	1344	1326	1304
				風 雅 54					続後拾遺 141				

全	全	五七才	全	全	五六ウ	全	五六才	全	全	五四ウ
1664	1659	1654	1644	1627	1618	1608	1591	1503	1542	1541
		風 雅 857			玉 葉 1333					

このような表によつて判明することは、巨視的なきめのあらひものとなつてしまふものであるが、将来の第一歩のためにここで検討しておきたい。

まず明らかなことは、勅撰集との共通歌がきわめて多いことである。『連証集』二十五首にあつては、十五首、内訳は古今が2（序を含む）、拾遺1、新古今8、続古今4（古今序との重複を含む）。『連歌寄合』四十六首（内一首は古今の歌、万葉と誤認）では、三十一首、内訳は古今4（序を含む、また続古今との重複を含む）、拾遺5、新古今11、新勅撰3、続古今5、玉葉1、続千載1、続後拾遺1、風雅1、新千載1。ついで『連珠合璧集』四十三首では、二十首、内訳は古今3（序をふくむ。また拾遺との重複あり）、拾遺6（古今との重複あり）、新古今7、新勅撰1、続古今2、続後拾遺3。この三つの寄合集を通覧すると新古今との共通歌が圧倒的に多く、ついで後撰を除く三代集の占める割合が高い。

『万葉詞』では勅撰集との共通歌は、四十二首を数える。全体で二百八十七首あるのだから、他の寄合集に比べると割合としては少ない数である。これが第一の特徴といえよう。勅撰の内訳を見るとさらに特徴が明らかになってくる。古今1、拾遺1、新古今1、新勅撰8、続後撰4、続古今6、玉葉8、続千載2、続後拾遺3、風雅5、新千載1、新拾遺2であつて、八代集からはわずかに三首、大部分は十三代集で、鎌倉室町の勅撰集と重なるのである。これを第二の特徴と見ることができよう。

前三者においては、万葉歌と誤認された歌が、それぞれ含まれていた。しかしながら、それらを見てみると、誤認してもやむをえない事情もあるように思われる。『連証集』では、二四に引かれる歌は続古今1162で、作者は允恭天皇、『日本書紀』允恭紀所収の古風の作である。一一三の歌も新古今1432で読み人知らず。作風は一応古風の体であろう。三九

は堀川百首、四五は貫之の歌で古今439、一四七は保安二年長実卿家歌合での為忠朝臣の歌でこれも誤認ではあるが、歌はそれぞれ古風に見える要素を持っている。堀川百首の「てたまゆらしづはためぬ」、為忠朝臣の「あをによしならのみやこ」などの用語は当時とすれば、万葉調に感じられたのであろう。『連歌寄合』83は古今551だが、万葉302と上の句が一致し、334も同じく万葉620と上の句が同じである。さらに『合璧集』の103は新古今1707で人麻呂としてとっているが、万葉278の上の句とほぼ一致する。222は夫木13475で、読みぶりがいかにも古風であり、519は拾遺1289、猿沢のうねめの歌話からの歌で人麻呂を作者としている。この歌を『連証集』一〇八でも人丸作として記していたのであった。平安時代には、万葉以来の類型が和歌を作るのに際してまだ生命を失わずにいて、よく利用されていたのであろう。そのような作を万葉調の歌として認識し、その歌を記憶によって書き記す際、「万」などと注記することはありがちのことであつたらう。猿沢のうねめのように、聖武天皇に仮託された説話も創作されており、拾遺355には

もろこしにて

かきのもとの人まろ

あまとぶやかりのつかひにいつしかもならのみやこにことづてやらん

などとあつて、人麻呂は渡唐までさせられている。

万葉をこのように幅広くとらえ、古風の和歌を広い意味での万葉的な世界に含みこんでゆく態度が寄合集に反映しているのだが、『万葉詞』にはそのような例は存在せず、すべては『万葉集』からの直接の引用と考えられる。この点は時代の経過にともなう厳密さともいえようが、一面万葉的な世界の発展の可能性が失われたことを意味しよう。

作者名についてもどの程度の正確さを求めるかが時代によって異なる。『連歌寄合』325、『合璧集』100には『拾遺集』967、854を引く。万葉ではそれぞれ作者未詳、長意古麻呂の歌であることを『拾遺集』は坂上郎女、柿本人麻呂に

誤る。ところが、新古今以後の勅撰集では、作者名を誤ることがほとんどない。万葉の作者未詳歌を人麻呂にすることがよくあるが、これは伝統的な作法であり、一方万葉で明記された作者をよみひと知らずの表記にしているのは勅撰集の作者表記の原則の適用であって、事実誤認ではないだろう。

室町時代に成立した『連珠合璧集』では平安的な猿沢のうねめの説話にもとづく和歌を万葉歌としてとりいれるとともに、従来さほど注目されていなかった、万葉332、3860から、「ぬずびと」と「戸はさしたれと」、「双六」と「ここの牛」などの語を連歌寄合としてとりいれている。『万葉詞』も、80番歌「思子等歌」から「ウリニ 子ヲオモフ」、910番歌「恋男子名古日歌」を引用し、88番歌「貧窮問答歌」から「酒ニ ワタモナキ 布カタキヌ」を寄合語にとり、山上憶良の再評価をしたことになる。これらは二十一代集には採られなかった歌である。

『万葉詞』は現在では、唯一この陽明文庫本によって伝来するのであるが、その書写ぶりをみると、「カリシコリ」（三六ウ）、「カミノニカミ山」（四四オ）、「シヤマツ君カ」（四九オ）などの例がある。それぞれ「かくしこそ」（809）、「二上やま」（1102）、「鹿待つ君が」（1267）などの誤りであろうが、万葉語に対する感受性を持たない筆者の機械的な書写のように見える。万葉を読み込んでいる原著者は犯さない誤りであろう。『万葉詞』は万葉歌に対して独自の価値判断を示しているのであるが、この写本の筆者は必ずしもこの熱意を共有していなかった。

このような苦心をはらって選択された寄合であるが、実際の連歌の場での程度普及したのであろうか。右に掲げた『合璧集』『万葉詞』の例であるが、連歌での実例はあまり見いだすことが出来なかった。<sup>注二</sup>しかし連歌作品は実際に興行された作品にくらべ、実にわずかな数しか伝来しておらず当時これらの語が好んで詠まれていた可能性もあり、寄合集に示されたことをもって、一つの手がかりとしなければならないであろう。

注一 『連証集』は中世文芸叢書4『鎌倉末期連歌学書』金子金治郎・山内洋一郎著

【連歌寄合】は未刊国文資料【連歌寄合集と研究】木藤才藏・重松裕巳著

【連歌合璧集】は中世の文学【連歌論集一】

【万葉詞】は陽明叢書14【中世国語資料】による。

注二 次のような実例を見いだしたが、資料の博搜によつてさらに多くの例は発見されるであらう。 顕証院千句第七名残裏

うつ双六にかくるのりもの

砌

角をふる牛の心はおそろしや

超

## 凡例

- 一 本稿は陽明叢書『万葉詞』のなかの寄合をなす語をとりだし、五十音順の索引を作成した。
- 一 同書は万葉語について、あるいは、注釈しあるいは、抜き書きし、あるいは寄合を示しているが、書式の一定を図るに不十分な点もあり、寄合と認めるや否やにも、編者の主観のはいりこむ余地がある。本稿では、私見によって寄合と認識した語のみを、とりあげた。
- 一 表記は原表記のままとし、歴史的仮名遣いに従って機械的に配列した。
- 一 その語の所在は丁数の数字と、表裏の別を表をオ、裏はウとし、何行目かを行数で示している。
- 一 解説でできなかった文字は、「\*」で置き換えたので、その他の読み誤りとともにご指摘を賜りたい。



あ				アハ嶋	七 4 8 才 1
明石ノ浦	三 2 8 ウ 5	アサチ原	八 5 3 才 4	アハチ嶋	六 1 3 ウ 1
明石ノトナミ	七 4 8 才 1	朝葉	七 1 4 才 7	アハチシマ	三 9 ウ 3
暁	七 4 9 才 5	朝ナキ	六 3 9 ウ 2	アハチノシマ	七 4 6 ウ 5
暁露	八 5 6 才 9	アサリ	七 4 7 才 9	アハノ野	七 5 1 才 6
アカラ柏	二十 2 6 才 4	葦	六 3 9 才 2	アハマク	三 3 2 才 1 1
アキサ	七 4 5 才 6	アシ	十 1 8 ウ 7	近江ノ海	三 2 9 才 4
アキツ	一 6 ウ 3	足カラ	六 4 3 才 6	油火	十八 2 5 才 8
アキツ野	六 1 3 才 7	アスカ	十四 2 1 ウ 1	アマカクレ	六 4 0 才 6
蜻蛉ノ宮	七 1 5 才 3	アスカ川	三 8 ウ 1 1	アマ雲	三 3 1 才 8
アキツノ小野	六 1 2 ウ 9		三 2 9 才 9	雨コモリ	六 1 3 ウ 6
秋萩	六 1 3 才 8		三 3 1 ウ 1 1	アマツキリ	七 4 3 ウ 1 0
アサカノ山	一 7 才 1		四 1 0 ウ 2	アマツタフ	七 4 7 才 5
アサカミノ	八 5 5 ウ 3	アスカノ川	七 4 5 才 1 0	アマノ川路	十 1 8 ウ 6
アサカホ	三 3 5 ウ 9	アソヒ	三 3 4 ウ 8	アマノカハラ	八 5 3 ウ 9
アサ衣	八 5 4 才 9	アソフ	五 3 7 才 9	アマヲトメラ	七 4 7 ウ 1
アサチ	七 4 9 才 7	アナシ山	七 4 4 ウ 1	アユ	五 3 7 ウ 9
	六 3 8 ウ 1 1		三 3 5 ウ 7	アライソ	六 3 9 ウ 1 0
	七 4 7 才 7		七 4 9 才 3		七 4 8 才 5

アラソフ	一	六ウ	八	イトチカクシルシ	三	九ウ	四	イエ	六	三	九オ	九	
アラ山	三	二	七ウ	四	イナミ	七	四	七ウ	六	三	九オ	二	
アラ山路	一	七オ	三	イナミ野	六	三	八ウ	一	七	四	六オ	八	
アラヤキ	五	三	六ウ	九	七	一	四オ	七	七	四	七オ	七	
い					七	四	七オ	七	五	三	八オ	一	
イカツチ	三	二	七オ	八	二十	二	六オ	四	家人	三	三	五ウ	一
イコマ山	十五	二	三オ	一	三	二	九オ	九	イホリ	三	二	七オ	八
石橋	七	四	五オ	一	犬	七	一	四ウ	イモ	三	九ウ	一	
石ハシル	六	四	〇ウ	五	イニシヘノ里	七	一	四ウ	イモセノ山	七	一	四ウ	一
イソカクレ	三	九	ウ	三	イハセノ森	八	五	一ウ	入江	三	三	四オ	八
イソコス浪	七	四	八ウ	五	イワセノ森	八	五	三オ	う				
イソサキ	三	二	九ウ	五	イハタ、ミ	七	五	〇オ	鵜川	一	七	オ	三
イソノカミ	三	八	オ	二	イハツ、シ	七	四	七ウ	鶯	五	三	七オ	四
イタフキ	三	三	六オ	九	岩ツ、シ	七	一	四オ		八	一	五ウ	一
イツミ川	六	四	三オ	一	岩ツナ	六	四	二ウ		八	一	五ウ	一
和泉川	六	四	二ウ	六	イハトカシハ	七	四	五ウ		八	五	二オ	三
イツミノサト	三	三	五ウ	一	石舟	三	三	〇ウ	ウクヒス	六	四	二ウ	一
出雲	三	三	二ウ	七	イハホ	六	三	九ウ	ウシホ風	三	三	一ウ	八
					イハレノ池	三	九	ウ	宇治	七	四	六オ	三

宇治川	七 4 5 ウ 9	梅ノシツエ	五 3 7 オ 7	か	六 3 9 ウ 5
空蟬	三 3 4 ウ 6	梅ノ花	八 5 2 ウ 4	カシキカタ	六 3 8 ウ 4
ウツラ	八 5 5 ウ 6	ウリ	五 1 1 オ 5	川ウチ	六 3 8 ウ 4
ウナテノ森	七 1 5 オ 1	え	六 4 1 オ 9	カ、ミ	七 5 1 オ 6
畝火ノ山	一 7 オ 2			垣越	七 1 4 ウ 4
ウネヒノ山	七 5 0 オ 5	枝二霜オケ	六 4 1 オ 9	カキツハタ	七 1 5 オ 3
ウネヒ山	一 6 ウ 8	お	十六 2 3 ウ 8	カクレ野	八 5 4 オ 9
卯ノ花	八 1 6 オ 8			カク山	三 2 8 ウ 1 0
馬	三 3 2 オ 4	老人	七 4 8 オ 3	カコ山	一 6 ウ 8
ウミオ	七 4 6 ウ 1	オキツス	七 4 4 ウ 5	カサシテ	五 3 7 オ 9
海ヲナス	六 4 2 ウ 8	オチタキツ	七 4 4 ウ 5	カサシノ玉	九 1 7 オ 8
梅	三 2 7 ウ 4	大海	七 4 7 ウ 6	賢人	九 1 7 ウ 1
	五 1 1 ウ 6	大サキノ神	六 4 1 ウ 2	カシコキ山	七 5 0 オ 3
	五 3 6 ウ 9	大宮所	六 4 2 ウ 6	カシキカタ	六 3 9 ウ 5
	五 3 7 オ 2	大宮人	六 3 9 オ 9	春日野	三 3 2 オ 1 1
	五 3 7 オ 4	オモシロキ	六 4 3 オ 4	春日ノ里	八 5 2 ウ 4
	五 3 7 オ 9		七 1 4 ウ 1	春日山	八 5 3 ウ 4
	五 3 7 ウ 3	思ミタレテ	三 3 5 ウ 9	カスミタツ	八 5 3 ウ 9
	八 5 7 オ 1	オル	七 4 4 ウ 1 1	カセノ山	六 4 2 ウ 8

カヒナヒ川	八 五 二 ウ 七	神サヒテ	三 二 八 ウ 一 〇	カヘリミスレ	一 七 オ 五	河ハヤミ	七 四 五 ウ 九	八 五 二 ウ 七	六 四 一 オ 二	三 三 五 ウ 一	三 三 一 ウ 一 一	カハツ	一 七 ウ 二	川クマ	七 四 八 ウ 一	カネノミサキ	三 三 六 オ 七	門	七 四 六 ウ 一 〇	カトリノ浦	五 三 七 ウ 三	五 三 六 ウ 九	カツラ	七 四 六 オ 五	カチ音タカシ	七 四 四 オ 六	カタ岡	八 五 四 ウ 三	片恋	六 四 二 ウ 一 〇		
キミ	三 三 五 ウ 七	キヌワタ	五 三 八 オ 一 一	キヌカス	三 九 ウ 一	キヌ	七 五 〇 ウ 三	布	六 三 九 オ 八	キソノ風	五 一 一 オ 二	き		カリコモ	三 二 八 ウ 八						鷹カ音	八 五 三 ウ 四	鷹カネ	八 五 五 ウ 九	通路	七 四 五 オ 三	カヤモカリツツ	三 三 六 ウ 二	鴨	三 九 ウ 四	神代	六 四 一 オ 四
車	六 四 〇 オ 二	クルスノ小野	六 四 〇 オ 二	雲トフ山	七 五 〇 オ 五	熊野	二 七 ウ 四	桑	六 四 二 オ 三	國ノ都	六 四 三 オ 四	クニノ都	六 四 三 オ 四	クツハキテ	八 五 二 オ 三	マ(ク)タラ野	五 三 七 ウ 六	クスリ	七 四 八 ウ 九	クサフカユリ	八 五 一 ウ 一 〇	八 一 五 ウ 九	草香ノ山				霧立ワタル	五 一 一 オ 二	清見	三 三 四 ウ 六	君	三 三 四 ウ 八



シカノスメ神	七	四	八	ウ	一
志賀	一	七	オ	一	
下衣	七	四	九	ウ	八
信濃路	十四	二	一	ウ	三
シノス、キ	三	九	オ	三	
	三	三	一	オ	三
シノヒ田	七	四	五	オ	三
椎	七	一	四	ウ	三
シホツヤマ	七	四	四	オ	六
シホヒ	三	三	二	オ	四
塩干ノキハ	七	四	六	ウ	五
嶋松	六	三	九	オ	八
シメシノ	八	一	六	ウ	三
霜クモリ	七	一	四	オ	二
白スケ	三	三	〇	オ	八
シラツル	六	四	三	オ	六
シラヒモ	八	五	一	ウ	八

白真弓	三	三	〇	ウ	一
白ユフ花	七	四	四	ウ	五
シロカネ	五	三	六	ウ	五
白妙ノ雲	七	四	三	ウ	一〇
白妙ノ袖	六	三	九	ウ	二
白ツ、シ	三	三	三	オ	二
す					
スカノ根	七	一	五	オ	一
スカノ葉	八	一	七	オ	三
スカモ	七	四	五	ウ	九
杉	三	三	五	ウ	七
	六	四	〇	オ	二
ストリ	十四	二	一	ウ	一
住吉	七	四	六	ウ	八
	七	一	四	ウ	三
スミヨシ	七	四	六	オ	八
	六	四	〇	ウ	九

セ	六	一	三	オ	八
セコ立ワタリ	六	三	九	ウ	一〇
セトノイハホ					
そ					
袖ツクヨル	八	五	五	オ	八
袖トホリ	七	四	七	ウ	一
袖ノミヌレテ	七	五	一	オ	二
蘭	五	三	六	ウ	九
た					
タカシマ	七	四	六	ウ	一〇
タカツ	三	三	〇	ウ	四
タカツキムラ(高槻村)					
タカマト	三	三	〇	オ	一
	八	五	六	オ	八
タカマトノ、	八	五	六	ウ	三
タカマト山	二十	二	六	オ	四
	八	一	七	オ	一

高山	八	一	七	才	三
タカラ	五	一	二	ウ	三
滝	七	四	四	ウ	一
滝ノ上	三	二	七	ウ	六
滝ノ上ノ三船山	六	一	二	ウ	八
竹田ノ原	三	三	六	才	四
竹ノ林	四	一	〇	ウ	八
タチ花	五	三	七	才	四
橘	七	四	九	ウ	八
	三	九	ウ	四	
	六	四	一	才	九
	十	一	八	ウ	五
	十三	二	〇	ウ	九
タツノ馬	五	一	一	ウ	三
タツ	三	二	九	ウ	二
	三	二	九	ウ	五
	三	三	一	ウ	八
	三	三	四	才	八
	三	三	六	才	四

玉橋	四	一	〇	ウ	八
玉ヒロフ	七	四	六	ウ	五
玉モ	八	五	五	才	八
鶴	十五	二	三	才	一
タツサハニナク	一	七	才	八	
七夕	三	二	九	ウ	五
	八	一	六	ウ	四
	八	五	五	才	八
	九	一	八	才	八
	十	一	八	ウ	六
	十七	二	四	才	八
	二十	二	六	才	五
七夕ノ	八	五	五	才	八
タノシク	五	三	七	ウ	一
旅行人	七	四	六	才	三
玉	五	三	六	ウ	五
玉	六	三	九	才	八
玉タスキ	一	七	才	二	
	七	五	〇	才	五

玉橋	九	一	八	才	八
玉ヒロフ	七	四	六	ウ	一
玉モ	七	四	七	ウ	九
	三	二	八	才	一
	六	三	九	才	二
	六	三	九	ウ	五
タムクル	六	四	〇	才	二
タホリ	五	三	七	才	九
ち					
力ノ岡	一	六	ウ	三	
千鳥	三	二	九	才	四
	三	二	九	才	九
チトリ	六	三	八	ウ	六
	三	八	ウ	一	一
つ					
使	三	三	五	才	五
月カタフキヌ	一	七	才	五	

ツクハネ	八 1 6 ウ 3	テラス月	七 4 7 オ 7	ナコノハマヘ	七 4 6 ウ 1
	十四 2 1 オ 8			ナタカノウラ	七 5 1 オ 2
	二十 2 6 ウ 4	と		夏葛	三 3 5 オ 5
ツクハ山	九 1 8 オ 6	トキツ風	六 3 9 ウ 5	ナテシコ	八 1 6 ウ 3
月夜ヨミ	三 3 6 オ 7	時ノアメ	八 5 5 ウ 3	七種	五 1 2 ウ 3
ツ、シ	三 8 オ 2	トコ夏	八 5 6 ウ 3	難波	三 3 1 オ 6
	八 1 5 ウ 9	常世ノ国	四 1 0 ウ 3		八 1 5 ウ 9
ツト	八 5 4 オ 6	鳥羽山	三 3 4 ウ 1		八 1 5 ウ 1 0
ツノ、松原	三 3 0 オ 5	遠里小野	七 4 6 ウ 3		八 5 1 ウ 1 0
椿	七 4 9 オ 3	トホツノハマ	七 4 7 ウ 4	難波方	七 4 6 ウ 5
ツハナ	八 5 3 オ 4	トラツノハマ	七 1 4 オ 8	ナラ	五 1 1 ウ 3
ツホスミレ	八 1 6 オ 1	トラツ人	五 3 7 ウ 1 1	ナラシノ岡	八 5 3 オ 7
	八 5 3 オ 1	トミ人	五 3 8 オ 1 1	奈良ノ都	三 3 1 オ 1 1
ツマ	八 5 3 オ 4	トモヤタハサミ	六 3 8 ウ 8	ナラノ都	六 4 2 ウ 3
ツマヨフ	七 4 5 ウ 2	鳥	七 4 8 オ 3	ナラ山	六 4 2 ウ 1
	六 4 3 オ 6	な		ナル神	七 1 4 オ 2
て		ナキ人	三 3 3 オ 2		
手フレシ	三 3 5 ウ 7	ナク鹿	八 1 7 オ 2		



萩	は				野上	野	の		ぬ	布カタキヌ	ヌレニシ			ニフノ川	ニギシマモリノ	ニハツ鳥	西ノ山	に
八 五 四 才 三		八 五 六 ウ 三	八 一 七 才 一	八 一 五 ウ 一 〇	六 一 三 才 七	七 四 六 才 八				五 一 二 才 八	七 四 七 ウ 一			七 四 七 才 二	七 四 九 才 七	七 五 一 才 八	七 四 三 ウ 八	
春雨	林	ハマツト	浜ツト	花エミ	ハナタチ花	ハツヲハナ	ハツセ川	ハツセ	ハツイヒ	ハツ嵐	ハチエ	萩ノ古枝	萩スリ					
八 五 三 才 一	十 一 八 ウ 五	三 二 八 才 一	三 九 ウ 一	七 四 八 ウ 九	七 五 一 才 六	二 十 二 六 才 五	七 四 四 ウ 五	六 四 〇 ウ 六	一 七 ウ 二	八 五 六 才 三	十 一 八 ウ 七	十 六 二 四 才 一	八 五 二 才 三	七 四 六 ウ 三	八 五 六 才 九	八 五 五 ウ 六	八 五 四 才 九	八 五 四 才 六
	ヒラノ湊	ヒハラ	ヒナノナカチ	人目	一重山	人ノ子			人ツマ	ヒタ人	ヒコホシ	日クラシ	ヒカタ吹	ヒカサノ浦	ヒカサノウラ	ひ		
	三 二 九 ウ 七	七 一 四 才 二	三 二 八 ウ 五	三 三 四 ウ 五	六 四 二 才 六	三 三 六 才 七	五 三 六 ウ 五	九 一 八 才 六	三 三 三 ウ 三	一 七 才 一	七 四 七 才 二	九 一 七 才 八	七 四 八 ウ 三	七 四 七 才 五	七 一 四 才 七			

## ふ

フカミル

六  
一  
三  
ウ  
一

富士

三  
三  
一  
オ  
八

藤

八  
一  
七  
オ  
二

藤波

三  
三  
一  
オ  
一  
一

舟ノリ

七  
四  
六  
ウ  
一  
〇

フリクル雨

三  
二  
九  
オ  
二

フリニシ里

八  
五  
五  
ウ  
六

古郷

三  
三  
四  
ウ  
八六  
四  
二  
オ  
六

## ほ

ホト、キス

八  
五  
四  
ウ  
三

時鳥

八  
一  
六  
オ  
八

郭公

八  
五  
三  
オ  
七

ホリ江

七  
四  
六  
オ  
五

## ま

マカチナミコシ

七  
四  
七  
オ  
九

槇

三  
二  
七  
ウ  
四

真木立ル

一  
七  
オ  
三

マクス原

七  
五  
〇  
ウ  
三

マスカ、ミ

十七  
二  
四  
オ  
八

マス鏡

四  
一  
〇  
ウ  
一

松

三  
三  
四  
ウ  
一

松浦

五  
一  
一  
ウ  
八

マツラ川

五  
三  
七  
ウ  
九

松浦路

五  
一  
一  
ウ  
八

マツラノ川

五  
三  
七  
ウ  
一  
一

松浦舟

七  
四  
六  
オ  
五

マトリスム

七  
一  
五  
オ  
一

マナコツチ

七  
五  
一  
オ  
二

マノ、浦

三  
三  
三  
オ  
六

マノ、萩原

三  
三  
〇  
オ  
八

## み

ミカサノ山

六  
一  
三  
ウ  
六

ミカノ原

六  
四  
〇  
オ  
六

参川(三川)

六  
四  
三  
オ  
四

ミカリ人

三  
三  
〇  
オ  
一

ミソキ

六  
三  
八  
ウ  
八

ミタレテミユル

三  
二  
八  
ウ  
八

ミタレ尾

四  
一  
〇  
ウ  
二

道行ツト

三  
四  
ウ  
八

御綱\*

七  
五  
一  
オ  
八

ミツノハマ

八  
一  
六  
ウ  
八

ミツノ松原

二  
七  
ウ  
四

水杖

一  
七  
オ  
七

水茎ノ岡ノ湊

七  
四  
七  
オ  
九

湊

六  
一  
二  
ウ  
八

ミナト風

七  
四  
八  
ウ  
三

峯コシ

七  
四  
六  
ウ  
八三  
三  
一  
ウ  
八七  
四  
九  
オ  
三

三舟ノ山	九	一	七	オ	九
御舟山	三	二	七	ウ	六
ミホ	三	三	〇	ウ	七
三穂ノ岩屋	三	九	オ	三	
ミホノ岩屋	三	三	一	オ	三
耳ナシ山	一	六	ウ	八	
都	六	四	二	ウ	八
宮ヒタル	五	一	一	ウ	六
宮人	三	三	一	オ	六
三山	一	六	ウ	八	
御吉野	六	三	八	ウ	四
三吉野	六	一	二	ウ	九
ミヨシノ川	七	四	四	ウ	一
海松	五	一	二	オ	九
ミルシルシナキ	七	四	三	ウ	五
ミワ	三	三	五	ウ	七
ミワノサキ	三	八	ウ	一	〇
	三	二	九	オ	二
	七	四	八	オ	五

水尾ハヤミ	七	四	六	オ	六
む					
向峯	七	一	五	オ	四
ムカヒノ峯	七	四	四	オ	六
ムコノ浦	十五	二	三	オ	一
ムサ、ヒ	三	二	九	オ	六
ムスキ	三	二	八	ウ	一〇
ムラ山	一	六	ウ	三	
目	七	四	四	ウ	三
メツラシキ	七	四	六	オ	八
も					
物思	三	三	〇	ウ	七
紅葉	八	五	三	ウ	四
桃	八	五	四	オ	九
	七	一	五	オ	四

や	三	二	九	ウ	五
ヤソノミナト	八	五	二	オ	七
柳	五	三	七	ウ	三
ヤナキ	六	四	二	オ	三
山川	七	四	五	オ	六
山キハ	一	六	ウ	三	
大和	三	二	七	ウ	四
山中	八	一	六	ウ	三
山ヒコ	八	五	二	ウ	七
ヤマフキ	八	五	三	オ	一
山吹	八	一	六	オ	一
ヤミ	八	五	五	オ	三
ゆ					
雪ハフリツツ	五	三	七	オ	二
ユクセノ水	六	四	二	ウ	六
夢	三	三	三	オ	六
	五	一	一	ウ	四

ユラノミサキ	七 4 7 ウ 9
よ	
夜鳥	七 4 9 オ 5
吉野	一 7 オ 3
吉野川	三 3 2 ウ 7
	七 4 6 ウ 1
	六 3 8 ウ 6
	七 4 4 ウ 3
	七 4 5 ウ 6
	九 1 7 ウ 1
吉野ノ滝	六 3 9 ウ 1 0
吉野宮	六 4 1 オ 4
淀ノツキ橋	三 3 3 オ 6
呼子鳥	九 1 7 オ 9
ヨフコトリ	八 5 1 ウ 5
夜道	三 3 0 ウ 1
ヨルヒカル玉	三 3 1 ウ 5
夜ワタル月	七 1 4 オ 2

ワカ、ヘルテ	十四 2 2 オ 4
若菜	一 6 ウ 3
ワカナツミ	八 1 5 ウ 1 0
我セカリ	八 5 1 ウ 8
我舟	五 3 7 ウ 6
我岡	三 2 9 ウ 7
ワキモコ	八 5 7 オ 1
ワサイヒ	四 1 0 ウ 3
早田	八 5 6 オ 3
ワスレ貝	八 5 5 ウ 9
ワタモナキ	一 7 オ 7
五	五 1 2 オ 8
中	
斗ナ野	三 3 0 オ 5

エミカホ	八 1 7 オ 2
エ	
を	
荻	十 1 8 ウ 7
尾花	二十 2 6 オ 4
ヲハマ	六 4 1 ウ 2
オミナヘシ	九 1 8 オ 6
女郎花	七 5 0 ウ 3
	八 1 6 ウ 8
	八 5 4 オ 3
	八 5 4 オ 6
*	
**	十三 2 0 ウ 9
**人	一 7 オ 1